

2023年9月22日(金)14時～16時30分

万葉うたがたりコンサート at 交野が原

会場 枚方市総合芸術文化センター

本館 ひらしんイベントホール

出演 岡本三千代と万葉うたがたり会

YOUTUBE video production by Katsura Photo graphics

第一部 旅人の追憶 YOUTUBE (公開) <https://youtu.be/Bec6bt6wT5M>

第2部「秋」を歌う 第3部 万葉うたがたりコンサート

YOUTUBE NHK ランまん画像未使用分(限定公開) <https://youtu.be/7i32msR4CgE>
YOUTUBE NHK ランまん画像未使用分(公開) <https://youtu.be/wSpQxYb3Kso>

第一部「大伴旅人の追憶」

平城の京 時雨彩色(しぐれいろいろ) 吉野旅情 日本挽歌～あるむちの花 梅の園

松浦佐用姫～領布振り伝説 手馴れの小琴 酒壺の抄 むろの木ワルツ 旅人追憶

〈休憩20分〉

第二部「秋」を歌う

愛の花 春秋競憲歌(春秋シヤンソソン) 秋の歌メドレー(四季の歌・虫の声・故郷の空・里の秋) 秋の七草

第三部「万葉うたがたりコンサート」

逢合橋 一上エレジー 恋歌 つばいち問答歌 言霊の幸ふ国く サンベDEツバキ

【出演】

岡本三千代と万葉うたがたり会

岡本三千代 (EL) 上末歩 (VO) 園田知子 (VO) 村田道代 (VI) 森田智恵 (PF) 山口ひとみ (VO)

「出演協力」坂本正巳 (遊劇体)

「スタッフ」 音響 坂本祐介 舞台監督 布施田治朗 映像:西本正人

「Special Thanks」 交野が原万葉学級 本山愛 山口千代子 犬養孝



YOUTUBE QRコード

（）あいせり

2020年の秋、万葉うたがたり活動の40周年によせて、西宮アーレンテホールにてコンサートを開催して以来、3年ぶりの舞台となりました。

何度かの節目を迎えるながら、この度も機会に恵まれ、仲間に恵まれ、何よりも万葉を歌うことの楽しさに勝るものではなく、続けてこれたことの幸運と喜びに感謝の気持ちでいっぱいです。万葉集の研究者でもない私ですが、近年『万葉集』に親しむ、『万葉集』を楽しむなど講座の機会が多くなり、おこがましくも万葉を語らせて頂いてきました。私はあくまでも万葉愛好家として、又、皆様には、かつて犬養孝先生に導いて頂いたように『万葉集』に興味や関心を持って頂いたり、古今通して変わらぬ日本人としての心の世界を共感して頂くことがあれば何よりと思っております。

本日第一部では、私にとっても最も興味深い人物である「大伴旅人」をテーマにものがたりでうたかたりを致します。2006年に初演を致しましたが、令和という新たな時代を迎え、久しぶりに私も新たな気持ちで取り上げたいと思いました。2部、3部はいつものように楽しく歌つて、語つてと、岡本ワールドをお楽しみ頂きたいと思っております。

今日のステージを支えてくださいる観客のみなさま、そして大好きな万葉うたがたり会の仲間に心から感謝の念で尽きません。

2023年9月22日 岡本三千代



第1部 「旅人追想」

平城の京

あをによし 寧樂の京師は 咲く花の 薫ふがごとく 今盛りなり

あをによし 奈良の都に たなびける 天の白雲 見れど飽かぬかも
故郷の 飛鳥にあれど あをによし 平城の明日香を 見らくし好しも

卷三の三二八(小野老)・卷十五の三六〇(作者未詳)・卷六の九九二(大伴坂上郎女)

時雨彩色(しぐれいろどり)

高円の 野辺の秋萩 この頃の 晓露に 咲きにけむかも
春日野に 時雨降る見ゆ 明日よりは 黄葉挿頭さむ 高円の山

時雨の雨 間無くし降れば 三笠山 木末あまねく色づきにけり

大君の 三笠の山の 黄葉は 今日の時雨に 散りか過ぎなむ

卷八の一六〇五(大伴家持)・卷八の一五七一(藤原八束^{やつつか}真楯^{またて})・卷八の一五五三(大伴稻公)

卷八の一五四(大伴家持)

吉野旅情

み吉野の 象山のまの 木末には ここだも騒ぐ鳥の声かも

大和には 鳴きてか来らむ 呼子鳥 象の中山 呼びそ越ゆなる

昔見し 象の小川を 今見れば いよよさやけく なりにけるかも

我が行きは 久にはあらじ 夢のわだ 瀬にはならずて 淵にありこそ

わが命も 常にもあらぬか 昔見し 象の小川を行きて見むため

卷六の九二四(山部赤人)・卷一の七十(高市黒人)・卷三の三一六・三三五・三三二(大伴旅人)



吉野川



平城京 朱雀門

日本挽歌「あふちの花」

おほきみ 大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕ひ来まして

いき 息だにも いまだ休めず 年月も いまだあらねば

こころ 心ゆも 思はぬ間に うち靡き臥しぬれ

い 言はむ術 為む術知らに 石木をも 問ひ放け知らず 家ならば 形はあらむを

うらめしき 妹の命の 我をばも 如何にせよとか 鳩鳥の 一人並び居 語らひし

こうそむ 心背きて 家さかりいます

くや 悔しかも かく知らませば あをによし 国内こくないと見せましものを

くわ 妹が見し あふちの花は 散りぬべし わが泣く涙 いまだ干なくに

おほ 大野山 霧立ち渡るわが嘆くおきその風に 霧立ち渡る

くわ 卷五の七九四・七九七・七九八・七九九（山上憶良）



あふちの花

梅の園

はるやなき 春柳 縵に折りし 梅の花 誰か浮かべし 酒杯の上に

わ 我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れくるかも

はる 春の野に 霧立ち渡り 降る雪と 人の見るまで 梅の花散る

うめ 梅の花 今盛りなり 思ふどち かざしにしてな 今盛りなり

いきのさかんそんじのおちかた 卷五の八四十（壱岐日村氏彼方）・八一二（大伴旅人）・八三九（筑前目田氏真上）



• 卷五の八二十（筑後守葛井大夫）

ちくこのかみふじいだいぶ

おおともとのたびと 卷五の八四十（壱岐日村氏彼方）・八一二（大伴旅人）・八三九（筑前目田氏真上）

梅の花 散らまく惜しみ 我が園の竹の林にうぐいす鳴くも

うちなびく 春の柳とわが宿の梅の花とをいかにか別かむ

梅の花 咲きて散りなば 桜花 繼ぎて咲くべく なりてあらずや

万代に 年は来経とも 梅の花 絶ゆることなく 咲き渡るべし

万代に 説(しょく)うけん(じょうじ)のふくしま
年は来経とも 梅の花 絶ゆることなく 咲き渡るべし
小監阿氏奥島・八二六(大典史氏大原)・

卷五の八二九(薬師張氏福子)・八三十(筑前介佐氏子首)

松浦佐用姫～領布振り伝説～

よろづよ
万代に 語り継げとし この岳に 領布振りけらし 松浦佐用姫
うなばら
海原の 沖行く船を 帰れとか 領布振りらしけむ 松浦佐用姫
ゆ
行く船を 振り留みかね 如何ばかり 恋ほしくありけむ 松浦佐用姫

とほ
遠つ人 松浦佐用姫 夫恋に 領布振りしより 負へる山の名
おと
音に聞き 目にはいまだ見ず 佐用姫が 領布振りきとふ 君松浦山
やま
山の名と 言い継げとかも 佐用姫が この山の上に 領布を振りけむ

卷五の八七三・八七四・八七五・八七一(山上憶良)・八八三(三島王)・八七二(山上憶良)

唐津市鏡山
佐用姫像



手馴れの小琴

ことと
言問はむ 樹にはありとも うるはしき 君が手馴れの 琴にしあるべし

いか
如何にあらむ 日の時にかも 声知らむ 人の膝の上 わが枕かむ

卷五の八一一・八一〇(天伴旅人)

古の 七の賢しき 人たちも 欲りせしものは 酒にしあるらし
験なき もの思わずは 一坏の 潁れる酒を 飲むべくあるらし

賢しみと 物言ふよりは 酒飲みて 醉ひ泣きするし 優りたるらし
この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫にも 鳥にも 我はなりなむ

なかなかに 人とあらずは 酒壺に なりにてしかも 酒に染みなむ

生ける者 遂も死ぬるものにあらば この世なる間は 楽しくあらな
まなかに ひとつひ まなかに ひとつひ まなかに ひとつひ まなかに

卷三の三四〇・三三八・三四一・三四八・三四三・三四九(大伴旅人)

むろの木ワルツ

わぎもこ 我妹子が 見し鞆の浦の むろの木は 常世にあれど 見し人そなき
ともうら 鞆の浦の 磯のむろの木 見むことに 相見し妹は 忘らえめやも
いそうへ 磯の上に 根延ふむろの木 見し人を いづらと問はば 語り告げむか

はなれそ 離磯に 立てるむろの木 うたがたも 久しき時を 過ぎにけるかも

ひと しましくも ひとりありうる ものにあれや 島のむろの木 離れてあるらむ
人もなき むなしき家は 草枕 旅にまさりて 苦しかりけり

卷三の四四六・四四七・四四八(大伴旅人)

* 天平2年(七三十年)庚午の冬12月、大宰帥大伴卿、京に向かひて道に上る時に作る歌

卷十五の三六〇〇・三六〇一(遣新羅使人)

おおとものたびと 卷三の四五一大伴旅人 * 故郷の家に還り入りて、即ち作る歌



卷3-447 むろの木 大伴旅人鞆の浦歌碑 藤井軍三郎



万葉うたがたりコンサート at 交野が原 第1部

旅人追想

はしきやし 栄えし君の いましせば 昨日も今日も 我を召さましを
かくのみに ありけるものを 萩の花 咲きてありやと 問ひし君はも
君に恋ひ いたもすべなみ 蘆鶴の 音のみし泣かゆ 朝夕にして
遠長く 仕へむものと 思へりし 君しまさねば 心利もなし
みどり子の 這ひたもとほり 朝夕に 音のみそ我が泣く君なしにして
世間は 空しきものと 知る時し いよりますます 悲しかりけり
卷三の四五四～四五八(余明軍) *天平三年辛未の秋七月、大納言大伴卿の薨する時の歌
(西暦七三一年八月三十一日 死亡)
卷五の七九三(大伴旅人) *神亀五年(七二八年)六月二十三日

☆旅人追想についてコメントを追加しました(出所 WEBに加筆しています)。

旅人追想の語りされた遊劇体の坂本正巳さん朗唱の歌(大伴旅人の亡くなる前の短歌)

指進乃 粟栖乃小野之 芽花 将落時尔之 行而手向六
指進乃 粟栖乃小野之 芽花 将落時尔之 行而手向六
指進の 栗栖の小野の 萩の花 散らむ時にし行きて手向けむ
栗栖の地の野に咲く萩が 盛りを過ぎて花散らす
そんな時になつたら訪ね 神にお供え捧げたいものだ
卷六一九七〇 大伴旅人(最後の歌)

大伴旅人は、明日香で生まれ30才頃まで明日香で暮らし、30才から40才半ばまで藤原京、40才半ばから平城京で暮らしました。最晩年には、大宰府の帥として西方にあり、その地で最愛の妻を亡くしました。その後奈良に帰郷して、妻を偲ぶ歌ばかりを歌つて、終には青春時代を過ごした明日香を偲んで、このような歌を作りました。おそらく萩の花は、亡き妻と出会った頃の思い出の花なのでしょう。

明日香は旅人の出生地、30歳まで過ごした思い出の場所です。
萩の花が咲き乱れている山野を走りまわり、馬を駆つた日々。
そこには小さな祠(ほこら)があり、神祭りの思い出も蘇ってきたのでしょうか。
念願の奈良に戻つたものの、已む無く病床に臥さざるをえなくなつた旅人が
思い浮かべるのは懐かしい故郷でした。



「何とか元気になつて明日香に行きたい。そしてあの祠の神に長寿を祈りたい」
そのような切ない想いも空しく、31年の秋、旅人は奈良の佐保邸で永眠します。

大宰府から帰京してわずか1年足らず。享年67歳でした。

旅人は臨終間際に、病床を訪ねた余明軍に、「萩の花は咲いていた」と尋ねたと伝えられて
余明軍は挽歌にしていました。

よみょうぐん

よみやうぐん

はな

「かくのみに ありけるものを 萩の花 咲きてありやと 問いひし君はも」 卷三一四五五
こんなにも 憐いものだつたのに 消える命のその際に 萩の花はもう咲いたかと
作者は百濟王孫系の人物で、長年旅人に付き添つた従者。
いまわの言葉を書き取り、五首の挽歌を奉げた中の一首です。

伊藤博氏は次のような心がこもつた弔辞を献呈されており(万葉集釋註)
人格者であつた大伴旅人の生涯を余すことなく語つておられます。

『「萩の花咲きてありや』は旅人が臨終のまぎわに放つた注目すべき言葉。

清楚な野の花「萩」に関心を払いながら旅人がこの世を去つたのは、いかにも旅人らしく味わいが深い。淡々とおおらかな生涯を送つた人でなければ、死に際してこういう言葉は吐けないであろう。詠つては、うるおいがあつてこそせず、自然にしみいるような旅人特有の調べとも、この言葉は調和している。

旅人は、眠るように、流れるように、悠々と人生を閉じたにちがいない。』

「萩散りぬ 祭りも過ぎぬ 立仏」 一茶

*「栗栖の小野」は明日香の地とされていますが所在は不明です。

指進乃は、難訓語で(さしづみの/さすすみ)とともに言われています。

「指進」は栗栖の枕詞 指す墨(印をつける墨)で大工道具の墨縄の意

墨縄を「くり寄せる」、あるいは墨黒の「くる」(黒)で「栗栖」に掛かるとも。



第2部 秋を歌う

愛の花(らんまん 主題歌 あいみょん 作詞・作曲)

春秋競憲歌(春秋シャンソン)

冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ
山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず
秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてぞしのふ 青きをば 置きてぞ嘆く
そこし恨めし 秋山われは

卷一の十六(額田王)

秋の歌メドレー

四季の歌・虫の声・故郷の空・里の秋

秋の七草

秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七種の花
萩の花 尾花葛花 なでしこの花 女郎花 また藤袴 朝貌の花

卷八の一五三七・一五三八(山上憶良)

第3部「万葉うたがたりコンサート」

逢合橋

彦星と 織女と 今夜逢はむ 天の川門に 波立つなゆめ

天の川 橋渡せらば その上ゆも い渡らさむを 秋にあらずとも

かささぎの わたせる橋に おく霜の しろきをみれば 夜ぞふけにける



交野市 逢合橋歌碑

卷十の一〇四〇(作者未詳*柿本朝臣人麻呂歌集)・卷十八の四一二六・百人一首六番(大伴家持)



藤袴とアサギマダラ



らんまん

春らんまんの明治の世を 天真らんまんに駆け抜けた—ある天才植物学者の物語

一上エレジー

わが背子せこを 大和やまとへ遣やると さ夜深さふけて 晓露あかとぎゅうに わが立ち濡たたれし
一人ひとり行ゆけど 行ゆき過ぎ難かたき 秋山あきやまを いかにか君きみが 一人ひとり越こゆらむ

神風かむかぜの 伊勢いせの国くににも あらましを 何なにしか来きけむ 君きみもあらなくに
見みまくり欲ほり 我あがする君きみも あらなくに 何なにしか来きけむ 馬うま疲つかるるに
うつそみの 人ひとなる我われや 明日あすよりは 二上山ふたがみやまを 弟世いろせと我あが見みむ
磯いその上うへに 生おふる馬醉木あしびを 手折たをらめど 見みすべき君きみが ありといわなくに

卷二の一〇五・一〇六・卷二の一六三・一六四・一六五・一六六(大伯皇女)

恋歌

我が命いのちの 全またけむ限り 忘わすれめや いや日に異ひけには 思おもひ益ますとも
君きみなくは なぞ身装みよそはむ 櫛くしげなる 黄楊つげの小櫛をぐしも 取とらむと思おもわす
恋こひ恋こひて 逢あへる時ときだに うるわしき 言いい尽つくしてよ 長くと思おもはば
ぬばたまみだの 我わが黒髮くろかみを 引ひきぬらし 亂ながれてさらに 恋こひ渡わたるかも
相あひみ見ては 恋慰こひなぐさむと 人は言いえど 見みて後のちにもぞ 恋こまさりける

卷四の五九五(笠郎女)・卷九の一七七七(播磨娘子)・卷四の六六一(大伴坂上郎女)
卷十一の二六一〇・二五六七 (作者未詳)

つぱいち問答歌

紫むらさきは 灰指はひさすものぞ 卷五の海石榴市やその八十の衢ちまたに 逢あれる兒こや誰たれ

たらちねの 母ははが呼よぶ名なを 申まさめど 路みちゆ行く人ひとを 誰たれと知しりてか

たらちねの 母ははに障さはらば いたづらに 汝いましもわれも 事成ことなるべしや

卷十二の三一〇一・卷十二の三一〇一・卷十一の二五一七 (作者未詳)



⇒桜井市海石榴市歌碑

卷 12-3101 挥毫：今東光氏



恋歌 Vol.3



二上山

玉鉢の 路行占に うらなば 妹は逢はむと われに告りつる

海石榴市^{みちゆきうら}の 八十の衢^{やそ}に 立ち平し 結びし紐^{ひも}を 解かまく惜しも

はね纏^{かづら} 今する妹が うら若み 笑みみいかりみ 着けし紐解く

卷十一の二五〇七・卷十二の二九五一・卷十一の二六二七（作者未詳）

言靈の幸ふ国へ

葦原の 瑞穂の国は 神ながら 言挙げせぬ國 然れども 言挙げぞ我がする 言幸く
ま幸くませと つつみなく 幸くいまさば 荒磯波 ありても見むと 百重波^{ももへなみ}
千重波にしき 言挙げす我は 言挙げす我は

磯城島の 大和の国は 言靈の 助くる國ぞ 幸くありこそ

卷十三の三二五三・三二五四〔柿本人麻呂歌集〕

サンバ D E ツバキ

巨勢山の つらつら椿^{つばき} つらつらに 見つつ偲はな 巨勢の春野^{はるの}
河上の つらつら椿^{つばき} つらつらに 見れども飽かず 巨勢の春野は
卷一の五四・五六〔坂門人足・春日藏首老〕



卷1-54 奈良御所市阿吽寺 犬養孝先生万葉歌碑



編集：桂 一男

2023・10・26

ルビ：高岡万葉ま
つり朗唱歌に参考
にして付けていま
す。



万葉うたがたりコンサート at 交野が原 第2・3部